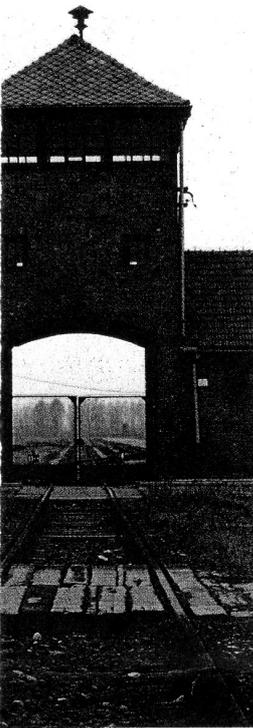


呼ばれる収容者2万人が銃殺された



強制収容所の通用門。



内部。床のない3段ベッドで8人が
ぎらされた。

所有者の名前が書かれていて、手前の1つに目をやるとマリー・カフカという名前があった。「フランツ・カフカの妹ですよ」と説明され、思わず息を飲む。私にとって一番衝撃的だったのは頭髪のコーナーである。切り取られた金髪が積み重ねられている横に布地のようなものが広げられている。「たくさんの髪の毛の中から同色のものを選びだし、織り上げた絨緞じゅうたんです。ガス室で髪の毛がすこし変色してますが。」と横で案内の老人が私の目を確かめるようにみつめて説明してくれた。

収容棟の間は中庭になっていたが、第10ブロックと第11ブロックの中庭の奥の方が壁になっている。その前にローソクや花がおいてあるが、この壁の前でSS隊員たちが約2万人の収容者を銃殺したということであった。

地下室を訪れたとき、ちょうど司祭に導かれたポーランド人のカトリック信者のグループに出会った。一室で賛美歌を歌いながら祈りを捧げている。この部屋で日本でも長年宣教師として活躍されたマキシミアン・コルベ神父が1人の収容者の身代わりになって薬殺されたと聞き、感慨をおぼえた。焼却炉とガス室は収容者棟からはすこし離れたところにあった。その入口のまえに所長のルドルフ・ヘスが処刑された絞首台がひっそりと残されている。

アウシュヴィッツを後にし、ビルケナウの収容所に向かった。収容所の面積は約53万坪もある広大なもので、広野のなかに忽然と姿をあらわす。中央衛兵所の建物の中央に入口があり、軌道が収容所のなかに通じている。写真で何度か見たあの光景だ。この門を通りすぎると収容者を満載した列車が到着するプラット・ホームがある。貨物車両にすし詰めになされ、各地から運ばれてきたユダヤ人たちはこのプラット・ホームに降りるや、親衛隊の医師たちによって2つのグループに分けられた。労働に適さないと判断された者はただちにガス室に送られ、残りのものが収容バラックに送られ、その後過酷な強制労働に従事させられた。

プラット・ホームのかなたに今も雑木林の茂みが見えるが、「あの林の影にガス室があったのです。」と案内人が説明してくれた。300棟以上の宿舎があったそうだが、現在ではその一部だけが残されている。木造バラックは粗末な小屋で、壁側の肩の高さに垂木がわたしてあり、その木に一定の間隔で鉄製の環が取り付けられている。「なんだか分かりますか。」と案内人が私に尋ねた。分からないと答えると、馬の手綱をつなぐための金具だったのだと説明してくれた。つまり厩舎として使われていた小屋をここに運んでき、収容者用バラックとして利用したのである。「52頭用の馬小屋だったものが1,000人もの人びとを収容する建物として使われたのです。」と彼は語気を強めて話してくれた。

もう1つのバラックには、長いコンクリート製の箱型のベンチのようなものが3列に並んでいる。その上には両側から座れるように、丸い穴が無数に空いている。それが便所であった。排泄物はいせつは下水管を通して別の場所に設置された糞尿処理場ふんにょうに集められる仕組みになっている。そこでは発生するメタンガスを燃料として使用するために抽出されていたのだそうだ。「何一つ無駄にせず利用しきるのが彼らのやりかたなんです。」と案内人は肩をすくめて語った。

5. 廃墟のまちオラドゥール(フランス)

陶器生産で知られるリモージュから西北20キロに位置するオラドゥール・シュル・グラヌは、四方をなだらかな起伏のある農地と森にかこまれ、近くをグラヌ川が流れている人口1,000人に満たない小さな村であった。珍しいことといえば、当時、リモージュからこの村までトラム(市電)が通じており、村人のなかにはこのトラムを利用してリモージュへ通勤する人もあったし、休日にはリモージュから村へ人が訪れ、近くをピクニックしたり、グラヌ川で釣り糸をたれる光景も見られた。村の駅ではトラムでやってきたリモージュ



26 公園のように美しく整備された広場の向こうに廃墟の街並みが広がる。

の若者が村の恋人との逢瀬を楽しむすがたなども見受けられたようだ。小さな喫茶店も何軒もあり、ハイカラな雰囲気もたまたま穏やかな村であった。ナチスドイツがフランスを占領した後も、ドイツ軍を見かけることなどほとんどなく、村人は平和な日々を送ることができた。

かつての平和な村がいま廃墟となって残されている。ある日、たった1日で焔につつまれ焼け落ちた村が、50年たった今、その日のままの姿で残っており、訪れる人には、それ以来この村では時間が止まってしまったかのような印象を与える。

私がオラドゥールを訪ねたのはウィークデーであったが、大勢の人が訪れていた。ひっそりとしずまりかえった廃墟を人びとは黙々と歩いてゆく。崩れ落ちた家の片隅に錆びた乗用車がうずくまっている。ミシンややかんが苦むした床の上に転がっている。村人が自ら立ち去ったのではなく、1日で皆殺しにされてしまったゴースト・タウンは、あまりにも重い歴史を我々に語りかけてくるように思えた。

事件が起こったのは1944(昭19)年の6月10日だった。この4日前に連合軍がノルマンディーに上陸している。迎え撃つドイツ軍がノルマンディーの前線へ向かうのを阻止すべく、レジスタンス運動の勇士たちによって鉄道橋が破壊され、2人のドイツ兵が殺された。またSS部隊の指揮官ディックマン少佐の友人がレジスタンス側の捕虜になるという事件が起こった。ディックマンが報復の対象として選んだのがオラドゥールであったと考え

られる。

6月10日の午後2時頃SSの部隊はまずオラドゥール村を包囲し、それから兵士らは村に入って、村人を1人残らず村の広場に集合させた。それから女性と子供だけを分け、村の教会に連行、このなかには学校から直接広場に集合させられた生徒たちもいた。

広場には男だけが残ったが、村長がその中から呼び出され、人質を選びだすよう命じられる。彼はそれを拒否し自分が人質になることを申し入れたが、SS側はそれに取り合わず、彼らを6つのグループに分け納屋など6カ所に連行した。そうした作業が一段落すると、納屋の各所に備えつけられたマシンガンの一斉射撃が行われ、息のある犠牲者はさらに1人1人撃ち殺され、火が放たれた。一方女性と子供が閉じ込められた教会には、2人の兵士により80センチ程の長さのかなり重量のある箱が運び込まれ、祭壇の前に置かれた。その箱には導火線がついており、兵士たちが立ち去ると同時にそれが爆発し、黒い喉を刺すような刺激の強い煙が立ちのぼった。教会内の婦女子はバタバタと窒息死し、逃れようとする人びとは外から容赦なく銃撃され、教会にも火が放たれ、村中が焔の海と化し、焼け落ちていった。

犠牲者は642人にのぼった。しかし奇跡的にもローディの納屋に閉じ込められた男たちのうち5人と、教会の1人の女性および危険を感じて村から逃げだした8歳の男の子が一命をとりとめ、その後この大量虐殺の目撃者として、起こったすべ



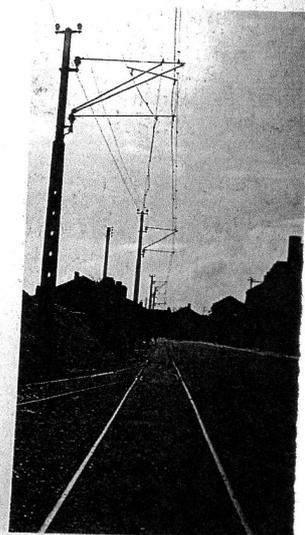
27 火を放たれレンガの壁だけになった建物が続く。



28 女性と子供が閉じこめられた教会。



29 当時の生活がしのばれるかまどの形残されている。



30 トラムの線路。ここだけが残されている。

てのことを白日の下に晒したのである。

ドゴール將軍は事件後間もなくオラドゥールを訪れ、後世の人びとが、このように凶悪な愚行が行われた悲劇の現場を決して忘れないようにと、その保存を強く望み、同時にこの廃墟の隣に新しいオラドゥールの建設を要請した。現在、彼の望んだとおりに、新しい村が廃墟に隣接して発展し、人びとはほかのどの町とも変わらない平和な生活を送っている。

考 察—戦争遺跡の意義

1. ヴィルヘルム皇帝記念教会とフラウエン教会

第2次世界大戦のヨーロッパ戦線において、ナチスドイツは一方の主役であり、加害者、戦争犯罪の張本人であったことはいうまでもないのだが、ドイツの一般国民の立場にたてば、兵士として、市民として多くの人が命を落とし、夫や息子を奪われ、家を焼かれ、すべてを失ったのである。ドイツ全土で展開された空襲、市街戦による破壊はすさまじく、ドイツはまさしく焦土と化したのであった。

ベルリンのヴィルヘルム記念教会の崩れ落ちた鐘楼を遺跡として保存しようという世論が盛り上がったのは50年代であり、精神的にもまだ戦災の傷痕の癒えない時期であったが、保存の動機は被害者としての恨みを記録として残すというよりは、平和な未来への警鐘としての意味が大きかったようだ。戦災建物の復興は、東西ドイツの統一後、一層精力的に行われているが、戦災遺跡の保存の意義という見地から、いろいろな人に意見を聞いたが、ほとんど反応が得られなかったのである。膨大な被害を受けたことは事実であっても、ドイツ国民にとってナチスドイツの戦争犯罪という過去の重荷はあまりにも大きく、その責任の自覚が被害者意識を上まっているかの感がある。できれば触れたくない傷痕であり、ベルリン復興はむしろドイツ統一を機に、古き良き時代の再現へと向かっているように思えた。ヴィルヘルム教会はす

でにベルリンの象徴として街の景観に溶け込んでおり、訪れる人に戦災を思い起こさせるという意味で市民権を得たといえる。それはそれでよいという程度の受けとめ方が、現代のベルリン市民のいつわらざる心境ではなかろうか。

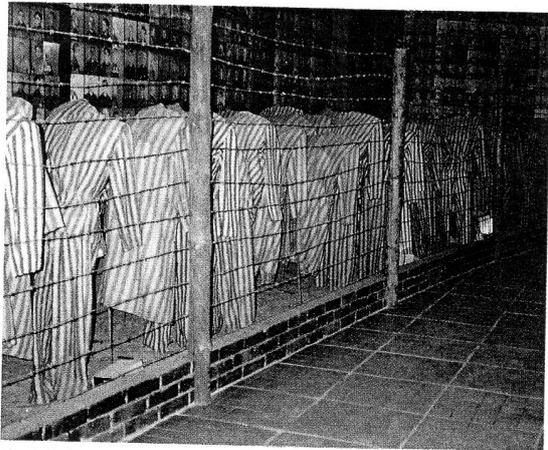
これに対しドレスデンのフラウエン教会の戦後の歴史はいささか異なる。すでに述べたように、この教会はヨーロッパ有数の美しい町と讃えられたドレスデンの象徴的建造物であった。空襲はドレスデンがいかにナチスドイツの一都市であろうと、罪のない市民を巻き込んだ非道な戦災といわねばならない。その意味もあって多くの議論があったものの、戦後50年間は空襲の惨劇の証人として廃墟のまま遺跡として保存されてきたのであった。しかし諸般の事情はあったもののドレスデンは教会の再建という180度転換の道を選んだ。その構想の基底になったのは華やかかりし頃のドレスデンの再現であるが、むしろ未来に向けての希望をふくらませていきたいという思いが強いように感じられる。つまり過去の忌まわしい出来事にこの辺りで終止符を打ちたいという思いがある。それはナチスドイツという、ドイツ民族のロマンの歴史にあまりにも逆行した暗黒の時代がドイツ人の心に深い心の傷を刻みつけたという事実である。

2. ダッハウとアウシュヴィッツ

ダッハウの町そのものは、ミュンヘン郊外の、中世以来の伝統をもつ牧歌的なバイエルンの一地方都市であった。この無名な町が悪名高き強制収容所の建設により、戦後も世界にその名を知られるようになる。収容所の敷地がそっくりそのまま博物館として保存された。堀や高圧電流の流れていた有刺鉄線もそのままに残されている。収容者用バラックは1棟だけが残されたが、館内の写真や文書資料を中心にした展示や解説に目を通した後では、当時の収容者たちの境遇やSS隊員の残酷な仕打ちが、50年の歳月を超えて見学者の脳裏に彷彿としてくる。

ドイツは戦後一貫してナチスドイツの行った戦争犯罪への反省と償いを具体的に実行してきた。自国の戦争における加害行為を直接に展示記録として残すという試みは、今までこれほど徹底した形では行われてこなかった。ダッハウの試みはその意味で画期的といわねばならず、戦後ドイツの歩むべき道への、国民の強い決意の現れとして受け止めることができるのではあるまいか。

150万人のユダヤ人の命がガス室をはじめとするシステムティックな殺人手段で奪われたと伝えられている。アウシュヴィッツにおける歴史的事実は、人間の悪の可能性の極限が現実化したとき、なにが起こるのかを人類に知らせ、^{きょうがく}驚愕させた。虐殺されたユダヤ人の膨大な所持品が陳列されて



① 収容者が着用させられた囚人服と収容者の顔写真。正面、右左の3方向から撮影された。

いるが、これほど多くを物語る遺品もめったにあるものではない。博物館を訪れて実際にその遺品を目にすると、150万人の計画的虐殺と言う事実が現実感をともなうてせまってくるのだが、他方でいかにして人間にそのような残虐行為が可能なのかという深刻な疑問がわき上がってくる。憎しみと蔑視だけがその理由であろうか。牧畜民族を祖先にもつアーリア人にとって、ユダヤ人は家畜と同然と映ったのであろうか。屠所へひかれる家畜、とでも考えないかぎりあのような計画的な大量虐殺が人間に可能な理由が思いつかない。ともあれアウシュヴィッツは人間の狂気への警鐘で

ありつづけることだけは間違いがない。

3. オラドゥール

小さな村の出来事であったが故に、一層その残酷な事実に説得力がある。全員虐殺の情景が鮮明に想像できる。村人1人1人の苦しみと恐怖の運命が読み取れるのである。静かな、平和な生活が営まれていたからこそ、ある日突然SS部隊によって引き起こされた全員虐殺の出来事は、あってはならぬこと、許されてはならぬこととはっきりと理解できるのである。戦争の集大成も実はそのようなものなのであろう。ベトナムで起こったソンミ村の大虐殺も、こうした人間の貴重な経験の後にまたしても繰り返された。同様の悲劇が他でも繰り返されている。オラドゥールの廃墟は、ヒロシマやアウシュヴィッツとともに、やはり人間の愚行をこれからも語り続けなければならないのであろう。

(おおさと いわお)
広島女学院大学教授・社会学



② オラドゥールのまちはずれにある墓地。リモージュ焼きの陶器に焼き付けられた顔写真と「虐殺1944年6月10日」の文字が痛々